



確率人間/*The Stochastic Man* (1975)/ロバート・シルヴァーバーグ
(田村源二訳)/サンリオ(文庫・12/25刊・¥520)

シルヴァーバーグの世界は、概して華麗である。何度も執拗に繰り返される同義語、時に切れ目なく、また段落の連続で綴られる文章など、そのテクニクもさることながら、対象である人物や舞台もまた、きらびやかな色彩に満ちている。

世紀末、混沌に満ちたニューヨークで、主人公は、地方政治家クインと出会う。彼は、やがて大統領になるであろうこの人物に魅かれ、補佐官の仕事を得る。だが一人の老人カーヴエイジャルが、その人生を狂わせはじめる。老人は、未来を見るのだ。それは不安定で、推測の域を出ない、予言とは違う。人々は、すべて確定した明日を持っている、自分はそれを見ているだけだ——老人は言う。誰も、その運命を変えることはできないのだと。

シルヴァーバーグの近作の特徴が、随所に見られる。上層社会の絢爛たる描写と、社会の退廃ぶり。そして、主人公は保守的な倫理観の持ち主で、優柔不断だ。確定と不確定、時間の意味、世紀末の社会など、相変わらずアイデアは申し分がない。もっとも、それが主人公の苦悩と、あまり関わりのないところに、ちよつと不満が残るのだが。(俊)